『国事詩集』を読む

――第１巻「文芸」部門に於ける愚人像（3）――

里　麻　静　夫

前　書　き

本論考は本紀要第 59 集及び第 60 集掲載論文の続篇である（それ故に、節番号〔Ⅳ〕は第 59 集と第 60 集を受ける通し番号である）。これらの先行論文をそれぞれ「論考 1」及び「論考 2」と記す場合がある。全体的注記としては、先ず、省略語句は〔…〕や「…」で示してある。次に、和文の亀甲括弧及び英文の角括弧の中は、単に括弧の中の括弧の内容を示す以外に、筆者による補足や書き換え等を示す場合がある。先行論文で言及済みの文献は書誌情報を省略して簡単な形で示すことがある。本詩集（先行論文におけるように、“POAS 1” と略記する場合がある）の注は、例えば当該作品の 1 行目に関する注の場合は「(1n)」と、3 ～ 4 行に関する注の場合は「(3−4n)」のように記す。尚、17 世紀当時の文章を訳したり概要を示したりする場合に、今日の人権意識に照らせば不適当と思われる個所があり得るが、そうである場合、それらは原著の内容・雰囲気を精確に伝えるために敢えてそのままにしてあることを了解願いたい。

Ⅳ　「文芸」部門収録作品に見る愚人像（3）

本論考を『国事詩集』第 1 巻「文芸」部門収録作品の一部に関する考察

の一応の締めくくりとしたい。最初に扱うのはドライデン作『マク・フレックノー』*Mac Flecknoe*（1676 ～ 77 年）である。極めて有名な作品であり、数多く論じられているので、本論考では国事詩群及び当時の英国の風刺伝統において占める位置や後のポープ作『ダンシアッド』*The Dunciad*（1728 年 3 巻版；1742 年 4 巻版）との関係を探ることを主軸として考察を加えたい。

『マク・フレックノー』は本詩集第 1 巻では唯一の、『国事詩集』全体では最初のドライデン単独による作品であり、長年の論敵シャドウェル（ドライデンの後に桂冠詩人になった）と、シャドウェルを支持した放蕩家・詩人ロチェスターを攻撃している。本巻ではこれまで他の作品における風刺の的としてしか出て来なかった強力な詩人であるドライデンが風刺家として登場して、「文芸」部門全体の詩的価値が増し、同時に言論のもつれ合いが複雑化の度合を増すことになる。

この作品は、シャドウェルを『ホラティウスの仄めかし』（論考 2 で扱っている）で褒めるロチェスターへの反駁でもある（POAS 1, p. 378）。攻撃する相手の作品を随所で巧みに利用しているので、愚の文体の模倣もある程度の規模で行なっている（この作品だけではないが）。

暗愚の老王フレックノー（アイルランドの詩人・劇作家）が後継者にシャドウェルを選ぶ段（7 ～ 24 行）には他の作品の模倣やパロディーが満載であるが、これらが風刺に厚みを与えてその効果を増していることは言うまでもない。この詩はこのようにそれまでの風刺の伝統を活用していると同時に、自らが後続作品にとっての伝統の一部になっている。19 ～ 24 行で「他の息子達には理性の幾らかの光が射し込んで、｜彼等を貫き、束の間頭脳が明晰になるかも知れない。｜しかし、シャ〔ドウェル〕の〔脳内の〕真の闇には一切の光が入り込まず、｜彼から立ち上がる霧が太陽を隠すのだ」と書いているが、「理性の…光」は詩人カウリーの模倣である[1)]。

『ダンシアッド』でも、愚の教えを後継者に対して説く愚の王の脳内に理性の光が一瞬射す個所がある（1742 年版第 3 巻 225 ～ 26 行）。又、「霧」は 110 行目にもあるが（老王フレックノーと並んで座るシャドウェルの額を栄光ではなくて霧が覆っている、そして愚が彼の顔の周りに揺らめいていた、と描く個所〔110 ～ 11 行〕）、やはり『ダンシアッド』の愚の霧を想起させる（1728 年版第 1 巻 152 ～ 54 行；1742 年版第 1 巻 173 ～ 76 行）。ここまで読んだだけでも、この詩が（他の作品と共に）『ダンシアッド』へと至る濃密な風刺の伝統を形成していること、イメージや表現等で『ダンシアッド』に先行していることが分る。

64 ～ 84 行はロンドン市壁のそばのバービカン地区の風紀の乱れと新劇場の低さを描くが、特定の地区の風紀の乱れや治安の悪さを愚人の文芸もどきの活動と結び付ける傾向が当時の風刺家にあることを、パット・ロジャーズの研究書『グラブ街』（論考 1 で言及済み）も指摘している。又、新王シャドウェルの戴冠式に無名作家達もやって来たと書くが（100 ～ 01 行）、貧しい三文文士は愚人として欠かせない。

118 ～ 31 行では、フレックノーが息子シャドウェルに塗油したり、王として持つ道具を授けたりする。最後に、シャドウェルのこめかみにケシの花が散らされ、その結果、居眠りのこっくりこっくりする動作が彼の頭を聖化するように見えた、と書く。眠りという〈無〉活動が愚人にとっては重要な「活動」であるのは、愚の勢力拡大が無への縮小であるという『ダンシアッド』的逆転現象である。ポープのこのモック・エピックの第 4 巻終盤において、暗愚の女王による若者への教育が終了する時に、いわば卒業の祝辞を述べようとする女王でさえ抗し難い眠気に襲われて、万物が首

1）　以下の版の注参照 —— H.T. Swedenberg, Jr.（ed.）, *The Works of John Dryden*, Volume II（University of California Press, 1972）, p. 315, 21-24n, 22n; Paul Hammond（ed.）, *The Poems of John Dryden*, Volume I（Pearson Education Limited, 1995）, p. 315, 21-24n, 22n.

を垂れる（1742 年版第 4 巻 605 ～ 06 行）。又、『マク・フレックノー』では群衆が喝采の声を上げてから父が子に「忘却の霧」を降り注ぐのだが（132 ～ 36 行）、油を注いで王にする儀式のこの模倣は『ダンシアッド』で愚の女王が愚の次期の王の頭にアヘンを注ぐ場面を想起させる（1728 年版第 1 巻 241 ～ 42 行；1742 年版第 1 巻 287 ～ 88 行）[2)]。

最後に、劇作家・詩人ベン・ジョンソンの機知は水の上の油のように常に浮いているがシャドウェルのそれは沈むという個所（185 ～ 86 行）に関してだが、〈愚＝鈍重〉という図式はありふれており、ポープへの影響をことさら論じる必要はないだろう。しかし、ポープが散文『詩で沈む技』*Peri Bathous: Or the Art of Sinking in Poetry*（1728 年出版）で重い機知故に詩で下落する方法を論じており、その論が『ダンシアッド』執筆と密接な関係を持ったことは注意すべきであろう[3)]。

次に、バッキンガム公爵の「詩神の書記官ジュリアン氏宛の日用書簡」*A Familiar Epistle to Mr. Julian, Secretary to the Muses*（1677 年）を検討したい。皮肉を込めて「詩神の書記官」と称されるロバート・ジュリアンは、出版が禁止された風刺の言わば集配センターを運営していた。そのジュリアン宛の遠慮のない（familiar）手紙の形で、サー・カー・スクループ（論考 1 と論考 2 で言及済みの人物）を風刺している（POAS 1, p. xxxviii）。この詩の激しい個人攻撃のスタイル（後述のように、スクループへの攻撃の常套手法の一つとして、醜い顔である等と書く）は、ロチェスターの仲間達による風刺と一致する（id.; 25−44n）。論考 1 と 2 のポイントの一つであるが、

2）　愚の勢力拡大等については、拙論「「大いなる眠りへの回帰」— A. ポープ作『ダンシアッド』についての詩論」（中央大学人文科学研究所篇『英国十八世紀の詩人と文化』〔中央大学出版部、1988 年〕所収）を参照されたい。

3）『詩で沈む技』が『ダンシアッド』執筆に繋がったことに関しては、以下を見よ— Valerie Rumbold（ed.）, *Alexander Pope:* The Dunciad *in Four Books*（Pearson Education Limited, 1999）, p. 363, Note a.

風刺と誹謗中傷が区別し難いことの例である。

最初の段は 1 ～ 23 行であるが、幾つかに分けて検討したい。先ず書き出し（1 ～ 6 行）で詩人が「この詩の町の下水」に「お前」と呼び掛けて、そこにありとあらゆる「機知の糞尿」（ソネット、風刺、猥談、冒涜）が捨てられる様を驚いて見せる――「不機嫌な奴が怒り心頭でズボンを脱いで、おあつらえ向きに見つけたお前のページにクソを残す」（5 ～ 6 行）。詩神に見放された連中が怒りに任せて書きなぐったものを糞尿扱いしているが、『ダンシアッド』が愚人と糞尿のイメージを結び付けていることに通じるだろう。

次いでジュリアンに呼び掛けるが（6 ～ 10 行）、彼をローマ皇帝ユリアヌスに擬している――「お前ユリアヌスは（と言うよりはむしろ、〔ローマ皇帝〕ウェスパシアヌスかも知れないが）、お前はこのクソの中から選りすぐりのギニー貨を集める。｜お前はあらゆる悪事を成す。書き写しながら、お前は崇高なミドルセックス伯爵から卑しいスクループへと身を落す」（7 ～ 10 行）。愚人の産物を収集して頒布するジュリアンも又グラブ街的環境形成に貢献していることは言うまでもない（「グラブ街外的環境」については、論考 1 と 2 で言及済み）。その彼と同列であると言って、スクループを攻撃している。

詩人はそれから、ジュリアンの部屋へキューピッドがバラッドを持ち込み、ヘボ詩人〔エドマンド・〕アシュトンが尻軽女に求婚するとは何という時代だ、と嘆く（11 ～ 13 行）。続けて、エセレッジはマルグレイヴを攻撃したこともあるが、今やこの劇作家・詩人の詩神は時代遅れになっている（16 ～ 17 行）、床に伏せている年寄りのドライデンは更に頼みにならない（18 行）、と書く[4]。そして詩人は、この背教者（＝ユリアヌス／ジュ

4）　この下りは、ドライデンが 1675 年 11 月から 77 年 10 月まで劇作を止めていたことに言及している（18−19n）。

リアン）に向かって、大物だったエセレッジとドライデンがいないも同然で風刺の供給に不安を感じているかも知れないが、喜べ、飽かずにヘボ詩をお前に提供するスクループのことを教えてやる、と言う（20−23n）。

24 ～ 44 行の段は「不細工な顔」（25 行）で有名な騎士〔＝スクループ〕がいる、その筆の力強さは有名である、とモック・ヒロイック調で始まっている（24 ～ 25 行）。この騎士はドンキホーテの血を引いており、機知と恋を試みて臆するところがない（26 ～ 29 行）。機知を持たないのに洒落たことを言おうとしたり、もてないくせに求愛をやめたりしないのはこの詩集の他の作品――論考 2 で扱っているロチェスター作『詩人のニニィ〔＝とんま〕について』等――でも揶揄されている点であり、愚人の勘違い・思い上がりを表す。

「顔が出来損ない」（30 行）であるとか、「自分の顔を見るだけで、…女性の群から罵られるのが怖くて外を歩く気にはならないだろう」（38 ～ 41 行）とか、彼を見れば少なくとも女性達が流産するのではないか（42 ～ 43 行）とか、容貌に対する情け容赦の無い悪口、誹謗中傷の連続であるが、少し前に述べたように、それは他のスクループ攻撃作品と同じである（25−44n）。

スクループの外見をこき下ろした後に、45 ～ 72 行の段では内面を攻撃する。毎月美辞麗句を吐き出しているので、その内面は牧歌とオードで一杯である（45 ～ 48 行）、醜いくせに次から次へと求愛している、恋情が高まるとヘボ歌を捻り出そうとしている、しかし、そんなひどい顔の男に詩が女を紹介した例はない（49 ～ 60 行）、等と書く。柄にもなく恋愛好きであるという攻撃は、筆者が論考 2 で取り上げたロチェスター作『『風刺の擁護』という最近の詩の作者と思われる人物について』でも行われている。ロチェスターによるこの詩は、スクループを矛盾の塊、中途半端な存在として描く点でも、本作での以下の描写と通じている。

詩人は、彼の恋歌を聞いて笑わない者はどこにもいない、それでも彼は（失敗が確実なのに）恋をし続ける、愛人も友人も手に入らないとは、この不幸なストレフォンにどんな運命が降り掛かるのだろうか（61 ～ 66 行）、と続ける。ストレフォンは牧歌に出て来る典型的な田舎の若者であるが、この詩の 1 年位前にスクループがロチェスターに対して用いた名前である（45n）。このストレフォンを、才人も馬鹿者も等しく忌み嫌う――イソップのコウモリのように、半分鳥で、半分獣であるからだ（67 ～ 78 行）。彼は馬鹿者ほど低い位置にはいないが、頂上にいるわけでもない。馬鹿者と最も利口な者の間にぶら下がっており、洒落者である（71 ～ 72 行）。この辺りは容貌を情け容赦なくけなすだけではなくなっており、風刺としての出来は良くなっている。ここのように風刺の対象を中途半端で矛盾に満ちているが故に何ものでもない、言わば〈無〉であると規定するのは、例えば本詩集第 2 巻に於けるシャフツベリー伯爵（当時の大物政治家の一人）に対する風刺にも見られる、風刺の常套の手法である[5)]。

73 ～ 80 行の段でも、スクループに鵺（ぬえ）的イメージを被せている。彼は完全な悪漢とは距離を置くが、虚栄と嘘があまりにも支配的なので、その何れもがほんの少し増えるだけで、局面を一変させる〔＝完全なワルになる〕だろう（73 ～ 76 行）。時間の余裕があればもっと悪人になったことだろうが、詩に夢中で自分の才能を誤解している、とにかく美しい詩人と思われたい一心なのだ、と続ける（77 ～ 80 行）。繰り返すが、勘違いは愚人の重要な属性である。スクループの場合、その対象が自分の才能と容貌であるとされている。又、中途半端な存在であると断じる攻撃の線に沿って、81 ～ 86 行の段では、ストレフォン／スクループの詩が哀歌とオードの間

5）　本詩集第 2 巻が収録するジョン・キャリル作『偽善者』に関する拙論を参照されたい―「『国事詩集』第 2 巻に見る英国王政復古期風刺の幾つかの側面」、秋山嘉編著『近代を編む―英文学のアプローチ―』（中央大学人文科学研究所研究叢書 76）pp. 73−115、中央大学出版部（2021 年 3 月 22 日）。

を進んでいる、と書いている。詩作の面でもどっちつかずの出来損ないである、と言うのだ。

最後の段 87 ～ 100 行は再びジュリアンに語り掛けており、スクループはお前をその血で食わせるペリカンであり、おまえの才人、おまえの詩人、いや、それどころかお前の友人でもある、と言う（88 ～ 89 行）。ヨーロッパではこの詩が書かれた頃まで、ペリカンが、子に与える食べ物が不足すると自分の胸にくちばしで穴を開け、そこから出る血で養う、と信じられていた。又、死んだ子に自分の血を与えて生き返らせると信じる者もいた。ここから、ペリカンは自己犠牲と博愛・隣人愛の象徴になっていた。この崇高なイメージが、皮肉を込めてジュリアンに用いられている。ジュリアンの商品である風刺の供給に不安が生じたところ（最初の段でその経緯を示している）、優しいペリカンの親であるスクループが子のジュリアンのエサ即ち風刺の不足を補うために、自分の血であるヘボ詩を食べさせるというわけだ。だから、ジュリアンとしては彼と彼の詩神をすぐに確保すべきである（91 行）。

笑おうが肘で突こうが、それでも彼は書き続ける。詩歌で決闘を挑み、詩歌で喧嘩する（93 ～ 94 行）。彼の務めはどんな詩歌で嘘を言おうかと考えることであり、その嘘が見つかると、怒り狂って言い返すことである（96 ～ 97 行）。弟を〔決闘で〕殺され、母は売春し、愛人を失い、それでも彼の筆は彼の剣なのだ（99 ～ 100 行）。スクループも又やみがたい執筆欲（cacoëthes scribendi）に憑りつかれている愚人である、と詩人は言いたい。やみがたい執筆欲に関しては、論考 2 でスクループによるロチェスターへの攻撃『風刺の擁護』を論じる際にも触れている。そこでは詩人の対話の相手が、相手にする価値のない愚物をやたら風刺するものではない、三文文士の真似はするなと、詩人に忠告している。但し『風刺の擁護』では、スクループへの攻撃があまりにも理不尽であるからこそ彼は執筆欲に抗し

難い、とされている。風刺合戦においては、敵も味方も同種の武器を用いることが多い。

次にロチェスターと彼の仲間によるスクループやドライデン等に対する風刺が収録されているが、その後に、ロチェスター側とマルグレイヴ伯爵との争いの産物を代表するものとして、マルグレイヴとドライデンによる『風刺論』*An Essay upon Satire*（1679 年）が収められている。本詩集は題名の前にマルグレイヴとドライデンの名前を置くが、解説はマルグレイヴが書いて原稿を回覧した、と書いている（POAS 1, p. 396）。（とは言え、一応名前を冠しているので、マルグレイヴがドライデンから何らかの助けを得てと考えるのが自然だろう。）当時の総花的（＝多くの人物を標的にする）風刺の中で、最も多くの権力者達を怒らせた。それらの権力者（国王、ポーツマス公爵夫人、ロチェスター、初代シャフツベリー伯爵等）は皆、力ずくで彼に仕返しできる立場だった（id.）。作者であると思われたドライデンが夜道で暴漢達に襲われたのは有名な話である。暴漢達を差し向けたのは主にポーツマス公爵夫人とロチェスターだったかも知れない（id.）。その推測が正しいかどうかはさて置き、ロチェスターは本作をドライデン作と考えていたようだ（POAS 1, p. 400）。マルグレイヴは後に『詩論』*Essay upon Poetry*（1682 年）において『風刺論』は自分だけで書いたと主張しているが、虚栄心が強かったので、受けた助けは何でも最小に見せていたかも知れない（POAS 1 pp. 400−01）。

解説は又、本作の出来は並であるとか、構造を持たないのはかなりの長期間段階的に出来上がったからかも知れないとか述べている（POAS 1 p. 401）。確かに、第 1 巻収録作品の中ではマーヴェルによる画家への助言詩や『マク・フレックノー』と比べれば凡作に見えることは間違いない。しかしながら、後述のように、国王を頂点とする様々な愚人（宮廷人が多

い）を取り上げて、彼等のような明白な欠点の持ち主達など取り上げる価値がないと言いながらもある程度巧みに風刺しているので、愚人像構築にはしっかりと貢献している面があると考え得る。構造を欠くという点に関しては、大まかに言って、最初の段では作者の風刺のあるべき姿を提示しつつ若干の風刺を行い、その後に何人かの敵に対する個別のより本格的な攻撃を展開しているので、ある程度の構造意識を認め得る（この点は後述する）。そして、その「構造」の特定と関係するが、個別の敵に対する攻撃が最初の段で提示されている風刺の基準にどの位適合しているかを見極めることがこの詩の評価を決める上で欠かせないだろう。

次の段から詩本体の検討を始めるが、最初の段（1 ～ 83 行）は、内容の面から幾つかの行を一つのまとまりとして扱い、それらのまとまりの概要を斜線で分ける（それぞれのまとまりに関して、筆者のコメントを括弧に入れて示す場合がある）。

1 ～ 14 行：〔…〕哲学者達と詩人達が、どの時代でも、人間という鈍重な塊を動かそうとした。しかし哲学者は、詩人と比べれば、教師だった。詩人だけが、教えることだけでなく喜ばすことを知っていたからである。（これは、ホラチウスに発する、当時の批評の常識である〔6n〕。）〔…〕風刺は常に詩の群れの中で輝いて来ている。それは詩の中で、人間に向かって思う存分彼等の欠点を告げ、彼等の虚しい行いともっと虚しい考えを笑う、最も大胆な方法である（11 ～ 14 行）。／ **15 ～ 20 行：**風刺家によって手法が異なる。全ての愚行を鋭く責めた者もいれば、それらを笑い、軽蔑して、恥じ入らせた者もいる。この二つの手法では、後者の方が成功した。と言うのは、陽気に狙って射る方が的を一番正しくとらえるからだ。／ **21 ～ 24 行：**しかし、我々が我々の案内人達を敢えて責めることができて、周りの者皆を非難した者達を非難することができるとしても、他の点で彼

等を好むことは正しい。以下の点でだけ古の人達は間違っていた、と私は思う。／**25 ～ 32 行**：甚だしいことこの上ない愚行を、彼等は激しく糾弾する。厳しく追跡するが、追うに値しない獲物を狩っている。そのような汚点を攻撃することほど簡単なことはない。そんな事をするのは下品な機知を持つ者だけだ。加えて、骨折り損である。誰が〔放蕩者サー・トマス・〕アームストロングに道徳を説く気になるのか？　のろまなアシュトン〔既出〕に教えようと思うのか？　それは、賭けをしている時に敬虔であり、舞踏会で賢いことであり、〔英国政府の中心である〕ホワイトホールへ機知と友情を持ち込むことである〔＝不可能なことである〕。／**33 ～ 38 行**：鋭い眼力で賢人にさえ潜む些細な欠点を発見して、それらを消す風刺が、中傷的風刺や不自然な劇よりも崇高である。／**39 ～ 42 行**：どんな非難より勝って、小物の才人は大物の才人が攻撃されるのを見て喜ぶ。その大物は判断力がより優れていて、自分への攻撃に最も気を病むものの、そういう風に懲らしめられるのを自慢する。／**43 ～ 48 行**：そういう〔より高度な〕風刺を皆がやりたがる。どんな馬鹿でも、自分はそういう風刺を行う立場にあると空想する（43 ～ 44 行）。〔…〕（この個所には自分にはありもしない才能をあると勘違いする愚人に対する皮肉がある。）／**49 ～ 83 行**：寝取られ男や踊るキザ男や戦うのが怖い将校のような平凡な標的は、この〔笑うタイプの〕風刺では扱わない。誰が、惨めな衆愚についてなど書く気になるのか？　薄馬鹿は尚更扱わない――そんな奴等を扱うのは我々の〔より高度な風刺の〕規則に反する。と言うのは、薄馬鹿は洒落男であり、衆愚はただの馬鹿であるからだ（49 ～ 54 行）。誰もが〔悪名高い暴漢〕ダンバー〔子爵〕と同じ位馬鹿で、〔チャールズ 2 世の庶子〕モンマスと同じ位愚鈍でいたいと思うのではないか――カー〔・スクループ〕のようであるよりは（55 ～ 56 行）。（このようにスクループへの辛辣な攻撃を混ぜている点にも注意したい。）狡猾な宮廷人も軽蔑されるべき

だ。こいつらは愚かな不埒行為で大騒ぎするが、調子に乗っていると、最後にはイソップのキツネのように〔狼の〕餌食になる（57 ～ 60 行）。（この後の 84 ～ 269 行で、これらの宮廷人達を風刺する。）国王の妾達も名指ししない――責める相手としては醜すぎるし、楽すぎる。バカな詩人が皆で彼女達を相手に大騒動を起しているが、彼女達は〔風刺の標的としては〕ありふれている（61 ～ 64 行）。しかし、〔妾達の間を〕のらくら歩き回るチャールズ〔2 世〕は、ゾッとするほど嫌なつがいの間に居て、気取った気紛れ（の女）と化粧を塗りたくった顔（の女）のどちらかの家で、いつもごまかしに会う。我々はしばしば、王への忠義心から書いた中傷文で、片方の女が〔王を〕出し抜けに振って、もう片方が彼を〔フランスへ〕売ったことを、片方が笑う振りをし、もう片方が泣く振りをすることを告げて来た。だが、彼が女を囲う限り、いつまでも罵ることなど誰ができよう？二人の女に同時に誤り導かれた王が嘗て居ただろうか〔…〕？（ここに登場する二人の妾の前者――王を振った方――は有名女優だったネル・グウィン又は淫乱で名高いクリーヴランド侯爵夫人であり、後者――王をフランスへ売った方――はポーツマス公爵夫人である〔65n〕。チャールズの妾は扱わないと言いながら、彼共々長々と文句をつけているのは、王と妾達の関係が看過できない害悪であると認識していたからであろう。）アーンリーとエールズベリーを始めとする〔二流政治家の〕間抜け達は、ここには登場させない。彼等は〔大物政治家〕ダンビーという偽の宝石の輝きを増すために、委員会に据えられているだけだ。このダンビーは、単に骨折って嘘をついたので賢いと思われていただけだ。（と言いつつ、最低限の攻撃はしている。）しかし、もうこれ以上胸糞の悪い男達にかかずらうのはやめよう――彼等の名前を書くので、ペンを持つ手が疲れた。こういう輩に別れを告げて、〔笑うタイプの風刺の〕より鋭い詩神にふさわしい主題を選ぶ時だ（74 ～ 83 行）。

この段が提示する風刺の基準は当時の常識に沿っており、その提示の仕方（表現）も平凡である。しかし、基準提示だけで終らずに国王に至る幾人かの人物を短く攻撃しており、それらの中には愚人像構築に資するものがある。

次段から個別の人物に対する攻撃が始まるが、標的の全てが政治家・宮廷人である。84 ～ 141 行がその段であるが、内容の面から、84 ～ 118 行と 119 ～ 41 行の二つに分けて概要を示す。それぞれの概要を更に幾つかに分けて、それらの区分の間に斜線を引く。筆者のコメントを概要に続く段で示す。

84 ～ 99 行：最初に、陽気この上ない男〔＝バッキンガム公〕を眺めよう。彼は、自分の不注意な天才を相手に無駄な戦いをしている。彼は陰謀を仕掛けるために大好きな安楽を途中でやめるが、決めておいた陰謀の時間を忘れる。しかし彼は、親友に笑い掛けて、〔当代一の喜劇役者である〕ノークス又はリーと同じ位に一緒にいて楽しい。しかし、理性或いは規則を狙うと、一番嘲られる者に変る。彼には決して用事で真面目に座らせてはならない。浮かれ騒ぎを見せて、その浮かれ騒ぎに機知の餌を付ければ、彼はその戯れの影で〔＝その影を猫のように追って〕遊ぶだろう――そのために人類が滅びることになるとしても。〔…〕／**100 ～ 18 行：**自分の本性を超えても良いことは全くない。そんなことをしても、元の生身の人間へと落ちて戻らなければならない。そのことを、我が国の小マキャベリ〔＝初代シャフツベリー伯〕が示している（彼は忙しい人種の中で一番すばしこい）。〔落下して〕不具になり、体は震えているが、この騒ぎのもとになった頑固な心は、自分の哀れな仲間を全く可哀想だとは思わない。〔…〕彼の元気満々の思考は、彼が這いずり回っている時に、天高く飛翔するのだ。物事を知る少数の人にとっての飛翔が、この下界では忙し

く這うことにすぎないのだ！　恍惚状態の人は自分が空を登って行くと考えるが、そうする時に、うっとりとなっている惨めな者として地上に横たわっているのだ。

バッキンガム公爵に対する攻撃は誹謗中傷（スクループの容貌に対する悪口のような）のレベルを超えた風刺になっている。シャフツベリーに対する攻撃の中で「不具になり、体は震えている……」は明らかに、ミルトン作『失楽園』（1667 年、74 年）で神を相手に戦って破れ、地獄へ落とされたサタンとその仲間の悪天使達と重ねている。本詩集の注は、ここでマキャベリに譬えられているシャフツベリーをドライデンによる『アブサロムとアキトフェル』（1681 年）のアキトフェル像と比べるよう促している（102n）。シャフツベリーは又、勘違いの愚人として描かれている。そして、飛翔と這いずり回り（Peri Bathous の沈下の類であると捉え得る）の対比は愚人が抱える矛盾をよく表現している。これらの側面からして、風刺としては水準に達していると言えるだろう。

119 ～ 41 行：現代の洒落男達は自分が空を飛べて当然であると空想して来ているが、頭だけを高い空に置いて、そこに楼閣を築いていることが多い。〔ハリファックス〕伯爵がその例だ。〔…〕あらん限りのことをして自分の平穏と戦い、「忙しい男」という素晴らしい観念を得ようとする。その結果出来上がるものと言えば、精々、自身と人類全体を疲れさせる精神の持ち主である。〔…〕機知を働かせて自分への害を画策する動物が他にいるだろうか？　歯と睾丸を持つ犬〔＝雄犬〕の中で、雌犬と骨から離れて、焼き串を回す犬になり、仕事にありつこうとして吠える（ヴィーナスが競争相手の犬達に遊ばれている時に）――そういう犬がいるだろうか？しかし、この浅はかな男は、政治家の名を得るために、友人と自らの自由と名声を手放すのだ。

この部分は、シャフツベリーに対する風刺と同種の言い回しで、愚人の勘違いを突いている。又、「忙しい」はシャフツベリーの悪しき特徴でもある。ここでも愚人像をある程度巧みに示している。

個別の人物に対する攻撃を続ける次の段（142 ～ 67 行）から、引用に準じる形で概要を示す（概要の後に筆者のコメントを示す）――

> 上手に書かれた〔笑うタイプの〕風刺はどんな気質（の人）も刺さないものだが、多面人（Polytropos）〔である大蔵卿フィンチ〕は別だ。彼は軽蔑されるあまりに告訴されず、それ故に、非難にもほとんど値しなかった。金目当てのことばだけを頼りに出世した――滑らかに毒づき、誤った推論をして〔…〕。だから私は、彼の見掛け倒しの理屈が地に落ちるのを見て、美辞麗句の馬鹿者がろくな数の言葉を持たない者に軽蔑されるのを見て、大変満足だ（理性というものは静かに座っており、弱い者に代って、繊細な、時として機智のある話し手を非難する）。これほどの雄弁がこれほど理性の少ない者に習得されるとは驚きである。大昔、言葉と機智は合致していたものだ。だからキケロは馬鹿者では全くなかったのだが、この男〔＝イングランドのキケロと称されたフィンチ〕は馬鹿者であるに違いない。法廷では口汚く、議席では無能で、上院議長席では悪漢であり、会議においては痴れ者である。私にとって不満なのは、このような馬鹿者が、正直であるよりは賢くなろうとし、善良であるよりは偉くなりたいと思うことである。

この段はフィンチにおいていかに言葉と理性が乖離しているかを語る。空疎な多弁と理性の寡黙との対立という図式の提示は興味深い。彼の理屈が地に落ちるのは、愚人に相応しい「落下」の実践である。ここも愚人像提

示に成功している。

次段 168 ～ 93 行のテーマは贅沢と怠惰に耽る連中が本当は快ではなく苦を得ているというものであり、ロチェスターの仲間である宮廷才人ドーセット伯爵を槍玉にあげる（概要の後に筆者のコメントを示す）――

> 別種の才人を示さなければならない。彼等の無害な誤りは、彼等しか傷付けない。過度な贅沢で喜びを得ることができると考えており、怠惰を自らの安楽に対する愛と呼んでいる。快楽に溶けて生きると常に偽っているが、その人生全体は断続的な苦痛にすぎない。彼等には暴飲暴食による消化器の不調、頭痛、淋病が多過ぎて、それらの間の時間が我々にはほとんど見えない。彼等はこの甚だしい間違いを犯す善意の人であり、快楽を快楽のためだけに失う。快楽にはその代償が付き物である。そして我々は、あまりにも大きい犠牲を払う時、人生を浪費することになる。そういう訳でドーセットは、思慮深い猫のように喉を鳴らし、結婚した〔…〕。そして先ず、罵るような〔求婚の〕詩で彼女〔＝求婚相手〕を悩ませた。それはまるで、ペンブルック〔伯爵〕の〔大型番犬である〕マスチフが一番おとなしい時のようだった。そしてある夜、自分の奴隷のような生活の全てを子沢山の未亡人だが子を生まない妻に売り渡した。鼻につくガマガエルのような女に触れて膨れ上り、彼は結婚の重荷を引きずり回した。そして遂に運命が、都合悪くも彼に元の自由を与えた。その運命を彼は、昔のようなコソコソしたやり方で使うだろう――夜通し飲んで昼間は居眠りする、という風に。彼はネッド・ハワードと同じ位愚鈍である――キビキビしていた時にはハワードに対する悪意ある詩を書いて、ハワードの馬鹿さ加減を有名にしたものだが。

「無害」は、これより少し後に、ロチェスター攻撃においても使われている言葉（「彼の無害な悪意」〔235 行〕）である。「そういう訳で」以下は誹謗中傷の面が強いが、風刺対象に関する特定の事柄を描いており、却って筆が冴えている感がある。「快楽に溶けて生きる…人生全体は断続的な苦痛にすぎない」は名文句であると言って良いだろう。「善意の人」と言うのは、彼等が「無害な過ち」を犯す類であるからだ。ドーセットが求婚詩を唄う時はマスチフが一番おとなしい時のようだったと言うのは、かなりうるさかった、という意味である。彼が結婚の重荷を引きずり回したと言うのは、太った妻を得意げに連れまわしたという意味だろう。「運命が…彼に元の自由を与えた」と言うのは、彼の妻が死んだことを指す（180n）。ネッド・ハワードは、論考 1 で扱った『詩人達の裁判』に登場するヘボ作家である。この部分には、作者が最初の段で提示している風刺の基準に照らして、下等な風刺とより高度な風刺が混ざっていると見なし得る。

次段 194 ～ 209 行ではマルグレイヴを標的にするかに見えて、その標的自身が書く作品の中なので、実は大した攻撃をしていない。プレイボーイとして色々な女とその家族を泣かせたが、とうとう捕まって結婚した、色々あったが、富と権力に恵まれて幸せに暮らしている、等と書く。風刺合戦に励んでいる陣営による身内のえこひいきの最たるものである。

次段 210 ～ 29 行はサー・チャールズ・セドリー〔＝シッド〕を風刺するが、この人物は群小詩人・放蕩者であり、既述の『ホラティウスの仄めかし』にも登場している（概要の後に筆者のコメントを示す）――

> 直喩で有名なシッドは、いつも快楽を探し求めて来たが、見つけたことがない。思いの全ては酒と女に向いているが、それらの思いが非常に悪いので、全く考えないことになる。彼が頼って暮らす肉体（flesh）は悪臭を放ち、強い。彼は自分の肉（meat）と妾を余りにも長く囲っ

ている。しかし、我々がこの敬虔な男を――あらん限りの方法で自分の体を傷付けているこの男を――誤解しているのは確かだ。我々が情け容赦なく罪と解するものが、この奇妙なカプチン会修道士にとっては規則である。深刻な仮面をかぶる隠者の中で、彼ほど常識と逆の生き方をした者はいない。どんなに胸が悪くなるような臭いも彼の巧みな鼻を不快にさせないのは奇跡である〔…〕――彼の鼻は、独特な技で、全ての悪臭から香水を、屁からエキスを抽出できるからだ。〔…〕一日中あくせく働くのは、夜に酔っ払うためだ。このお喋りの夜の鳥は何杯も酒を飲み、遂には〔洒落者サー・ジョージ・〕ヒューイットと〔乱筆家・政治家〕ジャック・ハウを才人と思うようになる。

思考が悪すぎて無思考になるのは、〈過剰＝無〉という愚につきものの逆転現象である。その逆転を、セドリーが常識と逆の生き方をしているという個所が分りやすく示している。又、その「逆」は勘違い（愚人の特性の一つ）と連動することもある。この勘違いは自分にはない才能をあると間違える場合（〈無＝有〉の逆転）が多いが、それをヒューイット等の他人に適用することもある。因みに、セドリーと妾の関係について本詩集は、妾を長く囲うという節操はマルグレイヴにとっては奇跡に見えたに違いない、と皮肉な注を付けている（210n）。

次段 230 ～ 69 行はロチェスターへの激しい攻撃である（概要の後に筆者のコメントを示す）――

ロチェスターを私は、彼が全く機知を欠くので軽蔑する（彼は〔悪賢い悪魔のように〕尻尾と蹄が割れた脚を持つと考えられているが）。彼が全人類に対して悪事を計画している時、その悪事の悪影響を実際に知っているのは彼だけである。それ故、魔女が恥をかいても当然で

あるのに似て、彼の無害な悪意もそれとほぼ同じである。彼の言葉は偽りであり、その機知と同じ位に気取っている。これでもかと言う位に狙うが、当ることは滅多にない。誰に対しても、その人が話している間はペコペコしているくせに、その人が背を向けると、その頭を割る。全ての動きが卑しくて、手足の全てが淫らである。行儀作法そのものが、彼にあっては何か一癖ありげである。彼はありとあらゆる生き物が偶然だけで作られることの証拠であり、正にキリグルーから良い性質を抜いたような人間である[6)]。全く彼はベッソス〔＝劇作家ボーモントとフレッチャーの作品に登場する臆病な大自慢屋〕のようにずっと生きて来て、自分自身が蹴られるのを画策して来たことが顕著ではないか。〔…〕彼は人を騙して、自分が危険な罠に陥る。そして、同じように卑劣に、その罠から逃れようと足掻く。こんな不名誉な人生なら、そこからサヨナラした方がマシだ――下劣に傷つけ、頭をいっぱい下げて服従するような人生なら。彼の詩など私からは勿論、他のほとんど全ての人からも忘れられて欲しい。彼には時として何らかの気質がある――しかし、機智は決してない。万一機知が当るとしても（そんなことはごく稀だが）、その機知は〔くだらない考えの〕クズの山に埋もれているので、それを見つけ出すのは燃え殻拾いの女の仕事に似ている。〔…〕彼の無駄な作品が卑俗で愚鈍に見えるので、話にならない作品本文はここでのコメントに値しない。その本文においては、時として〔たった〕一つの貧弱な思想が一ページ全体に及ぶ愚を償うよう仕向けられている。四十行の中にまあまあの行が一つだけしかない――それも、表現や想像力や着想抜きである。

6）　本詩集の注は、劇作家トマス・キリグルーかその息子ヘンリーであるが、多分後者であろうと推測している。そのヘンリーは陽気な宮廷才人だった（243n）。

ロチェスターには機知がないので軽蔑する云々から人に従う振りをしつつ裏切りの機会を探しているという部分では、彼が悪魔／大悪人であると思われていても、悪事を企んでも大したことはない、彼の風刺は無力であり、的外れである、毒を吐くくせに臆病である、と述べている。悪意の愚人だが「無害」であるとは、ドーセットに対して既に使われている表現である（既述）。ロチェスターの挙動と行儀作法に対する風刺に続いて喜劇の人物ベッソスに喩える部分、その後の省略個所を挟んで彼の不名誉な人生を皮肉る部分では、悪意を持って忙しく行動するが、それが〈自滅＝自己の無化〉に繋がるという愚人に付きものの逆転現象を描いている。それに続く後半は、ロチェスターの機知はごく稀にしか発揮されず、しかも的外れであることが多い、その様な機知の産物である彼の作品には内容がほとんどない、と攻撃している。この段は相手が本作品で最大の標的なので、悪口に力が入っている分迫力はある。誹謗中傷と機知の表れと見なし得る個所が混在している。

筆者自身のロチェスターに対する評価は、本詩集が収める作品に関する限り、これまで概して否定的である――風刺と言うよりは誹謗中傷に堕していると見なせる場合が多いからだ。とは言え、マルグレイヴによるここのロチェスター評は、後の文学史上でロチェスターに与えられている評価と比べて否定の度合が強すぎるだろう。しかし、喧嘩の相手が後の世にどのように評価されるか見通すことは通常困難である。又、マルグレイヴに詩人を正当に評価する眼を求めること自体に無理があるだろう。一般的に、喧嘩の当事者にとっては相手の総体的で客観的な評価や永続性の観点からの評価などどうでも良い話である。義憤からであれ私怨からであれ、今ここで相手をやり込めることが大事なのだ。相手の文人としての価値どころか人間としての価値を全否定するのは、風刺家同士の喧嘩では取って当然の手段である。そして、そのような極端に走ることは愚人の特性の一つで

もある。本作執筆にドライデンがどの位関わったかは不明である。しかし、彼がロチェスターに対する不当な評価を放置している、とは言えるだろう。そうであるとすれば問題は、ドライデンほどの文学者でさえ相手への悪意が混じると相手の真価を見誤ることが、そうでなければ、真価は認めていてもその評価を表に出そうとしないことがある点ではないか。このような近視眼的姿勢に陥るのは、風刺と誹謗中傷が分ち難いことから当然予想される事態である。

以上で個人攻撃を終えて、270 ～ 85 行は結びである――

> 人間とは何と虚栄心が強いものか！　そして、何と愚かなものか―〔…〕世間のくだらなさを鋭く示す時に、我々は他人を引きずり下ろすのだが、それが自分のくだらなさを持ち上げる結果になる。我々は自分が天使に見えるようにと、天使に化粧して彼等を小妖精に見せる〔＝天使を人間の次元に引き下ろす〕。そして、我々は極めて批判的な、難癖をつけたがる、口やかましい風刺家であるのだが、その目的は自分自身を喜ばすことである。私はこの詩でずっと、最初に風刺を教えた我が師達を相手にしてさえも、彼等の欠点を指摘した。そうすることによって、困難である余りに途方もなくて報いのない〔風刺という〕仕事が何であるかを記した。その私は今、そうするには不十分な力しかないのに、以前の時代が到達できなかった高い山へ上ろうとして骨折っている。私が〔山の頂上ではなくて〕底へ落ちるとしても当然である。〔であるならば、落ちないように、〕上手に書くようにしろ。さもなければ、全く書かないようにしろ。

筆者はこれまでに何度か、相手を愚人と呼び募れば募るほど自らの愚人の本性を露呈するという図式があることを指摘している。マルグレイヴが他

人を引きずり下ろすことが自分のくだらなさを持ち上げる結果になると言う時、この図式を意識しつつ、攻撃的風刺の利己的動機を批判しているように思える。風刺家は自分を天使に見せたいために天使を人間の次元へと引き下ろすと言うのは、自分を喜ばすためだけに行う利己的風刺（これは社会改良的風刺と対照を成す）は誹謗中傷であると言いたいのではないか。何にでも文句をつける口やかましい風刺家とは、16 ～ 17 世紀の一般的な風刺家像である（277n）。そういう風刺家である自分にも高慢の悪徳に染まる可能性があると自戒している点は、単なる悪口屋の域を超えた姿勢であると、少なくともそのような向上を目指すポーズを取っていると評価し得る。

この詩にある程度の構造を持たせようという作者の意識を認め得ると、本文を検討する前に述べた。その構造は 1 ～ 24 行における総論（主として、目指す風刺の規定）から各論（個別の人物への攻撃）へ至るというものである。そして作者は、最後の段の「上手に書くようにしろ」において、一方的に攻撃する風刺ではない、より高度な風刺を書くよう努めようと述べて、冒頭の風刺論へ回帰している。つまり、この詩には総論を受けて各論を展開し、最後に総論へ戻るという構造がある。しかし、内容について言えば、風刺のあるべき姿の提示の仕方が平凡であり、加えて、各論には総論の風刺論に沿わない部分（誹謗中傷に堕したりして理論を実践できていない部分）がある。その結果、解説にあるように、凡作の域は出ないだろう。しかし、誹謗中傷の次元を超えて愚人像構築に寄与している部分はある。